様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２８２

研究課題名（和文）アメリカ禁酒小説研究

研究課題名（英文）studies of american temperance narratives

研究代表者
森岡　裕一（morioka, yuichi）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：２０１３５６３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　禁酒小説は対象となるテクストの入手が困難なものが多く、できるだけ多くの信頼できるテクストを収集することが前提となる。研究期間中に何度かアメリカ出張を行い、図書館等でかなりの資料が入手できた。その整理、分析を継続的に行っている最中である。
　研究の成果は学会での口頭発表、著書の出版、論文発表で行った。とりわけ、アルコール依存の家庭で問題が生じたとき家庭を出ていくのはもっぱら男のほうで、責任が妻にある際も妻は家庭に残るという現象をいかに考えるかにつき、当時の家庭観、結婚観とのかかわりで解明できたことは、禁酒小説研究にとどまらず、19世紀アメリカ文化を検討するうえで意義深い。

研究成果の概要（英文）：　Since gathering many texts of temperance narratives is of utmost importance, I made several trips to the United States and collected rare and valuable materials at various institutions and libraries. I have been actively engaged in the analysis of those texts.
 What have been found in my research were published in a book and a paper, as well as through an oral presentation in an academic meeting. It suffices to mention that an interesting fact that it is almost always a wife that stays at home, even when she is the addictive drunkard has been successfully analyzed with reference to the contemporary familial and marital views. That alone is expected to contribute to the deeper understanding of not just temperance narratives but the 19th century American culture in general.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：禁酒小説　アメリカ文学　19世紀　家庭小説

１．研究開始当初の背景

(1)　応募者は、平成８年 12 月、日本アメリカ文学会関西支部第 40 回支部大会のフォーラムにおいて「酔いどれアメリカ文学」というシンポジウムを企画・実行し、好評をえた。その後同メンバーで共同研究を組織し、２年間にわたる研究成果を平成 10 年、共著『酔いどれアメリカ文学』（英宝社）として出版することができた。さらに、応募者は科学研究費補助金の支援を受け、個人研究を継続し、数々の研究発表を行った後、それまでの成果をまとめ、平成 17 年９月、単著『飲酒/禁酒の物語学－アメリカ文学とアルコール－』（大阪大学出版会）として出版し、また、同時期に出した Ｔ・Ｓ・アーサー『酒場での十夜』(2006)の翻訳・解説とともに、第一段階の研究の締めくくりをすることができた。次の段階である本研究は、禁酒小説の研究をさらに深化させ、並行して進めている家庭小説の研究と関連づけながら、19 世紀感傷主義の視点から両ジャンルを統合することである。

(2)　禁酒小説の先行研究に関して言えば、ジョン・クローリー、*The White Logic* (1994) やニコラス・ウオーナー、*Spirits of America* (1997) 、デヴィッド・レノルズらが編集した *The Serpent In The Cup*(1997)など、この分野のすぐれた研究は少数ながらあるが、その後、研究の進展は見られていない。また、それらの研究において、ポー、ホーソン、ディキンソンといったメジャーな作家・詩人の酒に関する作品を分析したり、注目すべき禁酒小説にのみ焦点が当たる傾向があり、本研究が意図する総体として禁酒小説を対象とする姿勢は希薄である。わが国においては酒文化に関する文化人類学や国文学など個別文学畑の研究は散見されるが、アメリカ文学に限ればほとんど未開拓の領域と言っていい。

(3)　また 19 世紀アメリカ女性作家や家庭小説の研究については、アン・ダグラス、*The Feminization of American Culture*(1977)、ニーナ・ベイム、*Woman's Fiction*(1978)、ジェイン・トムキンズ、*Sensational Design*(1985)、デヴィッド・レノルズ、*Beneath the American Renaissance*(1988)などをはじめとする単行本が多く出ており、論文を加えると枚挙に暇がない。わが国でも、1987 年の佐藤宏子『アメリカの家庭小説』を初めとして、その後も研究書は相次いでいる。また、『アンクル・トムの小屋』に特化した研究は、内外ともに今日に至るまで衰えるところがないが、それらの研究では、禁酒小説への目配りはまったくといって見られず、禁酒小説と家庭小説の二つのサブジャンルをつなぐという発想は見られない。したがって両ジャンルをつなぐアプローチをとる本研究はこれまでにない研究領域を開拓するものと思われる。

2.　研究の目的

期間内に解明を目指しているのは次の三点である。

(1　)ジャンルとしての禁酒小説を総体としてとらえ、ジャンルとしての特徴、傾向を抽出する作業を通してその構造を解き明かす。対象としては、禁酒小説の黄金期とも言うべき 1840 年代の作品が中心になるが、夫（父）の大量飲酒―没落―（ワシントニアンによる）救済―啓蒙活動といった多くの作品に見られる典型的パタンにとどまらず、被害者としての妻に焦点をあてたもの、子どもたちが視点人物になる作品、あるいは上流女性がアルコール依存症者になる話、悪魔、亡霊を導入した語り等々、多様性に富む禁酒小説の構造を解き明かす。

(2)　この分野でもっとも有名な Ｔ・Ｓ・アーサーについては、すでに研究を進め、成果の発表を行ってきた。本研究では、その成果をふまえ、ルシアス・サージェントなどの他の禁酒小説作家、およびメアリー・チェリスら女流禁酒小説家の分析をすすめ、とくにジェンダーの問題を中心に禁酒小説のイデオロギーを探りたい。その際、昨今再評価が進むスーザン・ウオーナー『広い、広い世界』(1850)、マリア・カミンズ『点灯夫』(1854)などに代表される家庭小説を比較材料として検討し、19 世紀感傷主義の伝統の中で禁酒小説を見直すことが有効と思われる。

(3) 上記との関連で、ハリエット・ストウの存在は大きい。すでにいくつかの作品に関する分析は終わっているが、奴隷解放小説『アンクル・トムの小屋』(1852)においても禁酒のモチーフが濃厚である点を強調したい。さらに、この作品における男女の力学が家庭小説としてみたとき興味深い問題を提起していることを解明する。それの発展として、ストウの家庭観、結婚観を手がかりに 19 世紀アメリカの、いわゆるドメスティック・イデオロギーが禁酒小説にいかに通底しているかを解明する。

３．研究の方法

対象領域のテクストが入手困難なものが多く、どうしても資料収集に努力を傾注する必要がある。そのうえで、禁酒小説・家庭小説という二つのジャンルの交錯の視点からテクストの分析を進める。集めたテクストの整理・分類をへて目録化も実現したい。さらにアメリカの研究者と連携して、日米双方で成果を公開する方法を模索したい。具体的には次の三段階を計画している。

(1) 研究を進めるうえで不可欠なテクスト入手の努力を継続する。1840 年代の禁酒小説について言えば、*Letters from the Alms-House, or the Subject of Temperance*(1841)、*The Price of A Glass of Brandy*(1841)、*Incidents in the Life of George Haydock*(1847)、*The Life and Experience of A.V. Green*(1848)など数年来、捜し求めているものの未だ入手するに至らず、本計画中にぜひ収集したく思っている。手段としては古書市場、ネット検索、米国の友人を介しての購入、インターライブラリーローン等あらゆる方法を用いるが、国内外の図書館などへ出向く作業は欠かせない。ハーヴァード大学英文科ニコラス・ワトソン教授、ペンシルバニア大学英文科デヴィッド・エスピー教授にはそれぞれの大学内図書館所蔵の資料に関し教示を受け、資料調査の許可・招待を得ている。ニューヨーク公立図書館の蔵書も貴重な情報源であり、現地へ出向いての調査が資料収集の重要な部分を占めざるをえない。テクストの収集と並行して現在入手している資料の分析も進めなければならない。その際、最新の研究動向を探るべく、この分野の指導的立場にあるアメリカの研究者、たとえば、禁酒小説分析の第一人者アラバマ大学のジョン・クローリー教授や、文化人類学で著名なペンシルバニア州立大学サイモン・ブロナー教授らとは、引き続き意見交換したいと考えている。得られた成果を口頭発表、および論文の形で発表する作業も続ける。

(2) 平成 25 年度以降については、24 年度に設定した研究計画をさらに発展させることが基本となる。国内外での資料収集はむろん続けなければならないが、テクスト分析作業が中心となる。分析結果について、一部を口頭発表および論文の形で公表する予定である。前述のアメリカの研究者と持続的に意見交換を続け、できれば英語で論文を発表する計画である。また、本年度までに「禁酒小説と離婚」「禁酒小説における女性の主題」などのテーマについては分析を完了している予定である。したがって、本年度中に、新たなテーマ、モチーフの設定をおこなう。

(3) 最終年度である平成 26 年度は研究の総括を行いたい。年度の後半には、研究成果を著書として世に問うため、少なくとも原稿の大半を完成させたい。平成 17 年に出版した単著はアメリカ文学と飲酒/禁酒の問題を包括的に扱ったものだが、今回は禁酒小説に絞った研究書として出版するつもりである。また、できれば、MLA（アメリカ近代語協会）の年次大会を含む海外の学会で、ハリエット・ストウの禁酒小説に関する口頭発表にも挑んでみたいと考えている。そのため、ジョン・クローリー教授と共同して、MLA の年次大会で 19 世紀禁酒小説のセッションを組んでもらえるよう働きかけることを計画している。

４．研究成果

(1) 研究成果のひとつの柱は『アメリカ文化のサプリメント』の刊行である。同書は、ポピュラーカルチャーやビジネスなど、類書にないユニークなアメリカ文化論を意図したものだが、その一章をアメリカの飲酒/禁酒文化の説明にさいている。禁酒小説についても扱っており、これまでの研究成果をふまえ、最新の情報を盛り込みつつ、一般読者にも分かるよう平易に解説している。とりわけ、アメリカにおける性管理の問題や、反知性主義、ネイティビズムと関連付けて論じた点は、より広い視点から禁酒小説、禁酒運動を見直すいい契機となった。研究成果の社会的還元のモデルケースとなりうるものと自負している。

(2) T・S・アーサーの研究に関してもほぼ完成段階に近づいており、19 世紀禁酒小説研究の大きな進展が見られた。前期の作品ばかりが注目されるアーサーの作家活動にとって、晩年の禁酒小説の持つ意義が同様に重要であること、とくに、説論と強制をめぐるテーマは、禁酒小説という範囲にとどまらず、幅広いコンテクストにおいて、人間の自由意思をめぐる問題に直結し、また、テクストに頻出する manliness というタームは、「男性性」について 19 世紀のアメリカがいかに見ていたかを端的に表しており、ジェンダー論の新たな切り口となって今後の研究の展開が期待できる。文学的には、「誘惑のレトリック」「侵入―排除」といった 18 世紀イギリス小説由来のモチーフの流れの

中に禁酒小説を位置づけることができ、同時期のサブジャンルである家庭小説との関連性を浮かび上がらせることができた。

(3) 学会での口頭発表、および後述の論文の形で禁酒小説における離婚のテーマを集中的に考究できたことは大きな成果である。家庭内で問題を起こす大量飲酒者が夫であれ、妻であれ、たいていの場合、家を出るのは夫のほうであって妻ではない。このジェンダーギャップをいかに説明するかを、当時の家庭観・結婚観と照らし合わせ、あるいは、すぐあとに台頭する離婚小説のジャンルを比較検討することで解明しようとした。その結果、禁酒小説とそれを生成・受容するアメリカ社会に通底するドメスティック・イデオロギーの構造が明らかになり、統一的視点で禁酒小説、家庭小説、離婚小説が把握でき、19 世紀アメリカ社会のジェンダー観がより鮮明になった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

<u>森岡裕一</u>、「家庭の呪縛―禁酒小説における「離婚」の不在」『言葉のしんそうー大庭幸男教授退職記念論集』（英宝社）、査読無、2015.3.25. 95~106 頁.

〔学会発表〕（計 1 件）

<u>森岡裕一</u>、「家庭の呪縛―禁酒小悦における「離婚」の不在」、日本英文学会関西支部大会招待発表、2014.12.21.　立命館大学。

〔図書〕（計１件）

<u>森岡裕一</u> 著、大阪大学出版会『アメリカ文化のサプリメントー多面国家のイメージと現実』2014.1.30、271 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

森岡　裕一(MORIOKA , Yuichi)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20135635

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし